

## 論文の要旨

論文題目 議論の場における言語行動 – 日本語母語話者と韓国人学習者の相違 –  
氏名 李 善雅 (Lee Suna)  
学位 博士(文学)  
授与年月日 平成 14 年 9 月 30 日

本研究では、自分とは異なる意見を持っている相手に対し、自分の意志表明をするというコミュニケーション目的を達成していく過程の中で、相手に対する配慮がどのように言語化されているのかに関して、日本語母語会話と韓国語母語会話、及び日本語接触会話を様々な面から考察し、分析を行った。

本稿は次に示す全 7 章から構成される。第 1 章では、本稿の研究課題と理論的な背景、そして研究の意義と本稿の構成を紹介した。第 2 章では、調査対象、データの収集方法、データの処理について紹介した。第 3 章から第 5 章では、自分の意志表明をするというコミュニケーション目的の達成と共に、聞き手とのよい人間関係を保つため、話し手が聞き手に対して、どのような配慮を行っているかについて考察した。詳しくは、第 3 章では、日本語母語話者と韓国人学習者の発話の内容構成に焦点を当て、相手に対する配慮がどのような言語表現で現れるのか、それが日韓でどう違うか、日本語母語話者の場合は日本語母語会話場面と日本語接触会話場面で配慮の仕方に違いがあるか、あるとすればどのような違いか、韓国人学習者の場合は韓国語母語会話場面と日本語接触会話場面で配慮の仕方に違いがあるか、あるとすればどのような違いかについて考察した。第 4 章では、議論の場において相手に配慮しつつ、自分の意見を述べるための方策としての「相手の発話のくり返し」に焦点をあて、これの「反論の前のやわらげ」の機能と「相手の話しやすい雰囲気作り」の機能の二つの機能について考察した。第 5 章では、自分の意見とは異なる相手の意見に共感を示し、人間関係の調整を行うときに現れる「ね」「よ」「よね」と自分の立場表明を行うときに現れる「ね」「よ」「よね」が相手配慮とどう関わるかについて考察した。第 6 章では、議論の場における自分とは異なる相手の意見を聞く際のあいづちの使い方に注目し、聞き手の話し手に対する配慮について考察した。第 7 章では、本稿のまとめと今後の課題を述べた。

考察の結果、次のようなことが分かった。「自分の意見だけ述べる」という発話が韓国人学習者に比べ日本語母語話者のほうが目立って少ないこと、また、「中立的な立場をとったり」、「相手の意見に共感を示したり」することが韓国人学習者に比べて多いこ

と、そして「自分に同意の話し手の発話」より「自分に不同意の話し手の発話」に対して同意を示すあいづちと重複形あいづちをよく使っていることなどが明らかになった。これが物事をはっきり言わない日本人と言われる原因の一つではないかと思われる。逆に、韓国人学習者の場合、日本語母語話者とは違って、相手の意見への共感表示や自分の意見のマイナス面を言うときの内容が具体的ではなく、発話の長さも短いこと、そして「自分に不同意の話し手の発話」より「自分に同意の話し手の発話」に対して同意を示すあいづちと重複形あいづちを多く使うことなどが明らかになった。これらの言語行動は、自分の主張の妥当性を強く訴えているように聞こえ、韓国人は物事をはっきり言うと言われる原因の一つではないかと思われる。このような二つの母語話者の言語行動の特徴は、異なる相手の意見に最初に反応する時にも現れた。日本語母語話者は、自分の立場表明を優先する立場表明型より、自分の立場表明を先送りする衝突回避型が多かったのに対し、韓国人学習者の場合は、立場表明型が多かったのである。このようなずれから異文化間コミュニケーションの障害になる誤解が生じる可能性は否定できないだろう。

本稿では、議論の場に見られる日本語母語話者と韓国人学習者の言語行動には、多少異なる部分があることを明らかにした。このような小さな食い違いが異文化間コミュニケーションの障害になる可能性を否定することはできない。

接触場面において、会話参加者の使う言語が同じ日本語であっても、参加者はそれぞれ異なる文化的背景を持っており、これによりコミュニケーションスタイルも異なる。異文化間コミュニケーションの諸問題はこのようなそれぞれの持つ文化の違いから来ると言っても過言ではないだろう。我々日本語教育に携わる者は、異文化間コミュニケーションの諸問題を解く一つのカギとして、日本語と学習者の母語の比較や学習者が使う日本語の分析とともに、日本語と学習者の母語の文化的特徴にも目を向ける必要があると考えられる。